農と暮らしの新たな視点を探る

産直コペル

sanchoku coper

2015.1
vol.9

被災地の直売所1

御嶽山噴火から2ヶ月 ふもとで働く人々を訪ねた

しまんと地栗

栗の木10,000本プロジェクト

四万十ドラマ 代表取締役 畦地履正（高知県）

「限界」って言うな

―― 東京農工大学　野見山敏雄 ――

10月上旬に地産地消優良活動表彰の現地審査で山形県飯豊町を訪ねた。この町名を「いいで」と読める人は相当の通だ。飯豊町は山形県の南西部に位置し、東は米沢市および川西町、西は小国町、南は福島県喜多方市、北は長井市にそれぞれ隣接している。1958年、飯豊村に中津川村が編入合併し、飯豊町が誕生した。

町役場から中津川地区（以下、中津川）まで、白川ダムを越えて車で約40分かかる。中津川は町面積の約60％を占めているが、そのほとんどは山林である。人口は1965年には2730人が住んでいたが、2014年3月末現在で315人と大きく減少している。町内の他地区と比較しても人口減少率は高い。これは白川ダムの建設が大きく影響している。

中津川民宿組合の女将さん達

中津川は限界集落である。限界集落とは人口の50％以上が65歳以上の高齢者になり、共同体の機能維持が限界に達している集落を言う。同地区の高齢者率は55・4％であり、その定義に当てはまる。しかし、限界集落という言葉はそこに住む住民にとって良いものではないし、「限界集落だから何だ」という反骨精神が湧いてくる。

農家茶屋「いろり」でいただいた昼食

中津川では、中津川小中学校（2013年3月末に閉校）の存続のために山村留学が行われてきたが、その受け入れ組織である「里親の会」から誕生したのが「なかつがわ農家民宿組合」（以下、民宿組合）である。民宿組合は町外に農村の魅力を発信するためには地元の新鮮な食材を利用した料理の提供が不可欠と認識し、その提供の場として農家民宿を始めた。

民宿組合は2007年に8戸でスタートし、現在は10戸の農家民宿が地区内にある。農家民宿の料金は1泊2食付き大人6800円、小人（小学生以下）5600円と民宿組合で統一されているが、料理の品数などは各民宿に任されている。

農家民宿一戸の定員は5名である。もともと地区内の農家には来客用の客室は2間あり、最大で5名の宿泊者という制限は都合が良かった。民宿組合はトイレや手洗い設置の改修など最低限の投資を行った。

一般客以外に中高校生の教育旅行で4校219名を受け入れ、うち1校36名は台湾からの修学旅行である。また、企業の社員研修や一般客を含めると2013年度の受け入れ客数は1000名を越え、売上は711万円である。地域経済としては決して大きな金額ではないが、山菜やキノコやジビエと言った無価値物をお金に換えて、財貨が確実に中津川地区の中で循環しているのである。

民宿組合のリーダーの一人は限界集落を逆手にとって、村を元気にすることで、自分たちの誇りを取り戻したいと述べていた。民宿組合の女将さん達には、限界集落の「限界」を跳ね返す住民の心意気が感じられた。そして、中津川の魅力に気付かなかった住民が、宿泊した人達から中津川の良さを教えてもらい、元気を取り戻しているのである。

最近は中津川から出た息子や娘たちが定年帰農することもあるし、移住者が農家民宿を開業する予定もあるという。限界集落の希望がここにある。民宿組合は農林水産大臣賞（交流促進部門）を受賞した。

野見山敏雄さん

東京農工大学大学院農学研究院教授

東京農工大学で教鞭をとっており、最近の研究テーマは、半商品経済を組み込んだ農林産物の生産と流通に関する総合的研究である。主な著書には、産直商品の使用価値と流通機構（日本経済評論社）や食料・農業市場研究の到達点と展望（筑波書房，共著）など多数。2012年11月より地産地消優良活動表彰審査委員会・委員を務めている。